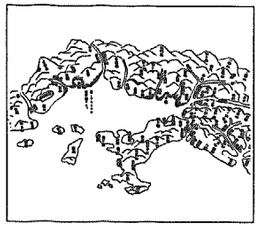
ルポ

河川改修

東京へ行って十数年になる友人は帰郷のたびに、黒埼の変わりようにびっくりこう言う。「変わってないのは中の口の辺りだけだね」。その中の口川の景観を大きく変える計画が実はある。来年の正月、彼が信濃川大橋をわたれば、善久の堤防が伸びていることや鷲の木水門の工事を発見するだろう。川はその姿を大きく変えられようとしているのだ。隅田川の近くに住む彼は、川をみるとほっとするという。将来、改修された故郷の川は、彼を安心させられるだろうか。



＊寛治三年（一〇八九年）の越後絵図。今の新潟平野は大海湾になっている。

＊蒲原…いまは新潟平野ともいう。狭い意味では西蒲原郡全域、南蒲原及び中蒲原の一部をさす。

＊洪水の記録…一六〇〇年から一九二一年まで九十二回、記録されていないものや中の口川などの支川の洪水を含めればこの何倍にもなるだろう。

＊横田切れくどき…山の果てから海ぎわまでも、田畑はすべて、家屋も水で濡れてみる目もあわれ。なすや豆などいずれもくさり、きゅうり、かぼちゃはみなかれた。うりもすいかもくうことできず。稲もかれはて米価は高く、みそを損じて塩のみなめる。たんすながもち流れてしまい、なべやかまなどみなうちしずみうすやおけるい残らずうせてむしろたたみも濡れたる上に夜着もふとんも臭さは臭し。

信濃川絵巻

松本楓湖作、大河津資料館蔵。明治二十九年の大洪水・「横田切れ」を描いたもの。流失家屋約五百戸、死者約五十人。蒲原は青い物が一つもないほど一面泥海となり、四か月も水がひかなかったという。

蒲原と呼ばれるところ

冬、上越新幹線で新潟を訪ねる人は、大清水トンネルを抜けると「雪国」を発見し感嘆の声を上げる。もし、彼らが春か夏もう一度新幹線で新潟駅まで来れば、もう一つの新潟を発見するだろう。「蒲原」である。長岡から新潟まで新幹線で約三十分間、彼らが見続ける一面真っ平らな平野、それをわたしたは蒲原と呼ぶ。

蒲原は昔、海だった。信濃川がそこへ大量の土砂を運び続けることにより、潟や沼の散らばる陸のようなものができた。鳥屋野潟や福島潟はそうした過去の名残である。信濃川は氾濫を繰り返し、そのたびに土砂の堆積が進み、徐々に沖積平野が形づくられていった。平野になると、人が住み、家が建ち、田畑が耕されるようになった。それは、人と川との長い長い戦いの歴史の始まりでもあった。

信濃川の洪水は記録上だけでも一六〇〇年（江戸時代の始まりのころ）から一九二一年までに九十二回起きている。三、四年に一回である。このため「田植えあれど稲刈りなし」とか「三年一作」とか言われてきた。

特に一八九六年（明治二十九年）の分水町横田の堤防が決壊した「横田切れ」という大洪水は、西蒲原郡全体を巨大な湖のようにしたといわれている。この洪水の悲惨さは「横田切れくどき」という約六千字の語り歌として残っている。多くの人が親から祖父母から聞かされてもきた。

しかし、この大洪水は大河津分水計画の実施を促した。三百年も前に計画され江戸幕府や明治政府に陳情しても、約十キロを掘るという大工事のため実現しなかった分水である。工事は一九〇九年（明治四十二年）に始まり一九二二年（大正十一年）に通水した。

前述のとおり一九二一年まで洪水を繰り返していた信濃川だが、分水が出来てから洪水は少ない。黒埼町では人々の記憶にはない。

明治四十二年に柳作に生まれた風間誠三郎さんはこう言った。「慶応元年生まれの親父からは横田切れや明治十二年、十四年の水害を聞かされた。柳作の家が流されたとか、川切れで潟が出来たとか。でも、オレが物心ついてからはないね。分水が出来たときはほんとにうれしかった。おかげで水害もなくなった」。また町の郷土史「大野町の今昔」でも分水完成後の水害は記されていない。

この分水のありがたさは大人だけでなく、子供も知っている。蒲原の小学生は遠足で必ず行くのだ。

決して安全ではない

建設省の大河津資料館（分水町）を訪ねてみた。館長の金子大作さんは「年間二百校も見学にくるのですよ。黒埼からももう四校もきています」と出迎えてくれた。ひととおり史料を見たあと金子館長はこんなことを言った。「蒲原は決して安全ではないのです。特に近年、昭和五十三年の六・二六水害級の大水が五十六年、五十七年、五十八年、六十年と大河津に押し寄せ、分水は限界に近い排水をしているのです」と。そして、さしせまった対策として「一つは大河津分水の大改修、もう一つは下流の改修がどうしても必要なのです」とつけ加えた。

風間誠三郎さん
柳作・七七歳

ルポ・河川改修 ①

大河津資料館を訪ねる

近年、大水が大河津に押し寄せている

大河津資料館館長　金子大作さん

金子館長。背後が分水路

大河津分水が出来てから支川の洪水はありましたが、信濃川本流はあまりありません。分水は下流の広大な蒲原平野を水害から守るだけでなく、適切な水利用を可能にし、蒲原を全国一の美田にしています。しかし、蒲原が永遠に守られたとはいえないのです。

分水はいま毎秒八千トンの水を流せます。昭和五十三年の六・二六水害のときは大河津分水から七千五百トン、関屋分水から二千二百トンを流しました。このような大水が五十三年だけでなく、五十六年、五十七年、五十九年、六十年と大河津に押し寄せています。最高水位はいずれも十五メートルを超え、私は大河津の観測史上五大洪水とよんでおります。明治二十九年の横田切れのときは十五メートル弱だったのです。五十三年を除き大水害に至らなかったため知られていないだけです。

近年、なぜ大水が発生するかといえば、以前はよく氾濫していた上流の支川が改修されそのまま信濃川の本流に流れ込むためです。さらに、用排水が整備され田んぼは水をたくわえず、道路は舗装され水は地下にしみ込みません。

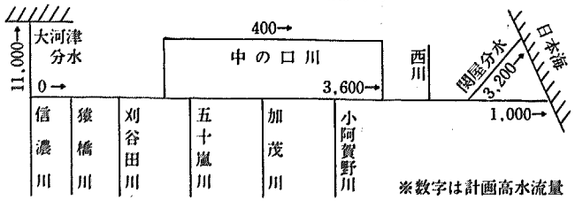
洪水の危険性は常にあるといえます。洪水から蒲原を守るためには大河津分水の大改修と下流部の河川改修がどうしても必要でしょう。

＊大河津分水工事…最初の工事は明治三年に始まるが八年に中止。本格的工事は四十二年に再開され大正十一年に通水。昭和二年に分水口部が破壊され、六年に修復が終了。

＊分水後の洪水…大きなものは昭和五十三年の六・二六水害を含め三回記録されている。

＊大河津分水大改修…完成時の計画流量は毎秒五千五百七十トン。補修や堤防のかさ上げ工事でいまは八千トンを流す能力があるが、百五十年に一度の大洪水を想定すると一万一千トンが必要。分水の耐用年数は限界に近い。下流部の河床や堤防の浸食も進んでいる。このため、建設省北陸地方建設局では改修の研究に今年から取り組んでいる。

＊信濃川下流図



※数字は計画高水流量